

半島空間研究分科会「i-都市再生・データに基づくまちづくり」を開催

プラサンナ・ディビガルピティヤ 分科会主査・九州大学分大学院人間環境学研究院准教授

1. 可視化ツールの開発

九州大学キャンパス計画室、九州大学学術研究都市推進機構との共催により、2020（令和2）年1月24日、福岡市中央区天神において、「i-都市再生・データに基づくまちづくり～可視化による計画立案と合意形成～」を開催し、83名（公22、民35、学26）が参加した。九州支部半島空間研究分科会は、2019年度の内閣府「i-都市再生」モデル調査に採択され、九州大学キャンパス計画室、九州大学学術研究都市推進機構と共同で、糸島半島に移転した九州大学を核とする学術研究都市を題材に、3D都市モデルと各種属性データをビジュアル化し、ARを活用した都市デザイン調整・シミュレーションを行うシステムを開発している。糸島半島への企業誘致・プロモーションや、施設建設のシミュレーションなどに役立つツールに応用・拡張していくための取り組みを紹介するとともに、都市開発の計画・立案、合意形成における課題とデータの活用に関するパネルディスカッションを行い、参加者はARによる都市シミュレーションを体験した。

2. 基調講演と主題解説、パネルディスカッション

九州大学学術研究都市推進機構の刈茅初志事務局長が主催者を代表して挨拶し、（1）内閣府地方創生推進室の赤星健太郎都市可視化調整官がi-都市再生モデル調査事業の概要と目的について説明した。続いて、（2）九州大学学術研究都市推進機構の横内正明事務局長が九州大学学術研究都市づくりについて説明し、（3）筆者と九州大学副理事・キャンパス計画室の坂井猛教授がデータに基づく九大研都市の現状を解説した。さらに「都市開発の計画・立案、合意形成における課題とデータの活用」をテーマにしたパネルディスカッションを行った。コーディネーターは坂井猛教授（前出）、パネリストに、佐賀大学芸術地域デザイン学部の有馬隆文教授、九州大学アジア防災センターの三谷泰浩教授、九州先端科学技術研究所の荒牧敬次専務理事・副所長、赤星健太郎氏（前出）が登壇し、まちづくりワークショップなどで活用する際に参加者がARの位置づけを正しく理解し誤解のない運用を行う必要性、行政担当者の交代に伴う負担回避のためのデータ活用、公民学をまとめていく連携の難しさなどが課題として挙げられ、その

解決に関するアイデアと方向性を出し合った。

3. ARによる都市シミュレーションの体験と今後

パネルディスカッション終了後に、ARによる都市シミュレーションの体験、ポスター展示、交流会を行った。会場でのアンケートでは、有効回答者数43名の9割以上が、（1）セミナーが有意義であった、（2）3D都市モデルは地域を把握するうえで有効である、（3）AR都市情報システムが役立つ、と評価した。今後は、さらにデータの可視化を充実させ、整備途上の糸島半島における成長コントロールのツールとして使っていきたい。



パネルディスカッション



参加者によるAR体験



糸島半島の1:1,500模型展示